

# 「小さな親切」運動静岡県本部賞

## 帰り道で

裾野市立西中学校 三年

杉山 礼唯



(作文、何書こう。)

そんなことを考えながら私は帰り道を歩いていた。お題は小さな親切。授業で原稿用紙が配られてずっと考えていたけれど、ちっとも思いつかない。思わずため息がもれてしまう。そのとき、後ろから救急車のサイレンの音がきこえ、そのまま私の横を通りすぎた。そういえば前もこの道で救急車を見たな、とふと思いだした。あれは二年生のころだっただろうか。

いつものように友達と帰っていたあの日も後ろから救急車の

音がきこえてきた。でも、あの日はたしか車が混んでいたな。遠くにきこえていたサイレンの音が大きくなっていく。しかし、車は混んでるうえに赤信号のせいで長い列をつくっていた。こはほば最後尾。通れるのかと思っていたら、音をききつけた車がさっと左右に寄っていく。中には近くのコンビニに入ってしまう、道をあげようとしている車もいた。それを見て、自分でも訳が分からないのだけど、思わず私たちは足を止めていた。音が隣を過ぎていく。いつのまにか信号は青になっていた。車

がゆっくりと動きだす。そこではっとして私たちは再び歩きだした。このとき私は心の中で感動していた。こんな当たり前のことで感動しているなんてなんか恥ずかしくて顔にはださなかった。でも、たとえ救急車に道をあけてあげることが義務で、当たり前のことなのだとしても、この救急車を待つ人のため、乗っている人のために瞬時に全員がお互いのことを考えながら動いたことが心からすごいと思った。

小さな親切ってこういうことだと思う。相手はおろか、きつと自分さえも気づいてないほどのほぼ無意識のうちの思いやりの行動。それは本当にささいなことだったりするのだろうけど、たしかに誰かが相手のことを思ってしまったことなのだ。

救急車が通りすぎた後、前方を見てみると先ほどコンビニに入っていた車が、列に戻ろうとしていた。車の列は動いていない。ゆずっているのだ。わざわざコンビニに入ってまでどいてくれた車に。自分たちが動きやすいように移動してくれた車に、感謝を込めて。なんだか最後まで絵に描いたような出来事だなと私は思った。でも、これは実際に起きた出来事であり、そしてきつとどこでも起きうることなのだと思う。そう心から思えるのって素敵なことだと感じた。

